［課程-２］

審査の結果の要旨

氏名　安藤　俊太郎

本研究は、思春期に好発する精神疾患の予防において精神保健学的および精神医学的観点から重要な役割を持つ、前思春期における精神的ストレスに対する援助希求態度に関連する神経行動生物学的要因、心理学的要因、社会環境関連を包括的に検討することを試みたものであり、下記の結果を得ている。

１．　前思春期において、女児の方が男児より援助希求傾向が高かった（オッズ比（以下 OR）1.80、95%信頼区間（以下 95%CI）1.51-2.14、p<0.001）。一方で、月齢、第二次性徴、認知機能などは援助希求態度と有意な関係がなかった。

２．　心理学的要因としては、非開示性が強いほど積極的な援助希求態度を持たない傾向がみられた（p<0.001）。そして、抑うつ症状や精神病様症状が強いほど、援助希求傾向が低くなっていた（共に p<0.001）。他者を援助する傾向が高いほど援助希求傾向が強い一方で（p<0.001）、問題解決における性役割についての社会規範を持つ児童は、そうでない児童と比べて積極的な援助希求態度を持つオッズが約 4 分の 1 程度に減少していた（p<0.001）。

３．　社会環境関連要因としては、主養育者が積極的な援助希求態度を持つ場合、児童も積極的な援助希求態度を持つ傾向がみられた（調整後 OR 1.34、95%CI 1.05-1.71、p=0.018）。また、母親が宿題を助けてくれると認識している児童は、そうでない児童に比べて積極的な援助希求態度を持つ傾向がみられた（調整後 OR 1.32、95%CI 1.02-1.69、p=0.034）。そして、相談できる人数が多いほど援助希求傾向が強かった。特に、相談相手が 1 人もいない場合に比べて、相談相手が 1 人いることで、積極的な援助希求態度を持つオッズが 10 倍以上に上昇した（p<0.001）。

４．　援助希求態度の男女差があることは、精神的ストレス問題の認識や、問題解決における性役割についての社会規範などが、援助希求態度に与える影響が男女で異なるためであると示唆さ

れた。

以上、本論文は前思春期における精神的ストレスに対する援助希求態度に関連する要因の包括的検討を行った。女性であること、他者を援助する傾向、主養育者の積極的な援助希求態度、母親が宿題を助けてくれるという認識、相談できる人数の多さ、などは援助希求態度を促進する一方、非開示性、抑うつ症状、精神病様症状、問題解決における性役割についての社会規範、などは援助希求態度を妨げることを明らかにした。本研究はこれまで検討の乏しかった、前思春期における精神的ストレスに対する援助希求態度に関連する要因の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。